

ジョージア (グルジア) 便り その39

『ジョージアの大家族』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



ジョージアの大家族

ジョージアの友人と家族の話をして
いるとやたら彼の祖母の話題ができて
きた。あまりにエピソードが多いので冷
静に考えると少なくとも彼は4人の祖
母の話をしている。

しかし祖母というのは一般的に2人
しか存在しないものじゃないか？それ
とも彼の家は複雑な家族構成をしてい
るのだろうか。

いや違う。ジョージアの人はいわゆ
る大叔母のことも「おばあちゃん」と
カテゴライズし、いとこはほぼ兄弟で
ある。ジョージア人にとって家族とは
親戚一同を含めた概念であるようだ。

僕にとっての家族のイメージは長方
形の机、もしくはこたつを囲み、母の
作る料理を

父と弟と
もに楽しむ
こと。コン
パクトであ
り、僕の父
を中心とし
た核家族の
形態という
ものだ。し
かし僕は家
を離れて久
しく、弟も
先日香港へ

と旅だった。やがて家族団欒の風景は
僕や弟を中心としてそれらに付随する
ものへと移り変わるのだろうか。

一方でジョージアの場合はどうだろ
う。大きな長机をいくつも繋げ、母、
叔母、祖母が共同で料理を振る舞い、
席に並ぶのは、父から祖父、叔父、大
叔父、兄弟にいとこ、いとこの彼女ま
でが揃う。別に特別な日だからという
わけではなく、場合によっては彼らが
一つの狭い家でひしめき合って住んで
いることもある。今の日本においてこ
れだけ親戚が集まるのは葬式か結婚式
のときくらいではなからうか？

なんだかその光景は話でしか聞いた
ことのない戦前の日本の田舎を思い浮
かばせる。同じ名字を持った親戚が周
りに何人も住み、地域の他の隣人らと
ともに共同体を形成する。第1次産業
を中心とした生業のせいもあってかお
互いに助け合って生きてきた。それが
戦後になって第2次、第3次と経済の
主軸が変わるうちに、僕の親父のよう
に地方から東京へ出てきて核家族と言
われるものを形成したのだ。

ジョージアは主軸になるような産業
に乏しく、平均給与の水準も先進国レ
ベルには及ばない。首都トビリシへ出
てきたところで安定した職はなかなか
見つからないのが現状だ。だからこそ

親戚一同で支え合うのが当たり前なの
だ。遠い親戚の不幸でも自分の事のよ
うに受け止め、良いことがあれば食卓
を皆で囲んで祝う。日本人が忘れかけ
ている家族や地域の人のあたたかさか
ぬくぬくと感じられ、羨ましい。

最近ではジョージアにも海外の資本
が参入し、昔とは比較にならない著
しい経済発展を遂げている。しかし経済
の恩恵はジョージアの大きな家族の共
同体を引き裂いてし
まわないだろうか？

とぼとぼ歩いてい
ると、タクシーの運
転手が「ブラザー、
元氣か」と親しげに
話しかけてきた。
ジョージアの大家族
は経済に起因するも
のではないかもしれ
ない。人と人との間
の距離感がもともと
近い民族なんदार
う。その人懐こさに
僕は少しホッと
した。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

